闘いの構図（下）

青山光二

闘いの構図（下）

青山光二

新潮社

闘いの構図（下）

昭和五十四年七月十日　発行
昭和五十四年十月二十五日　二刷

著者　青山光二

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務〇三（二六〇）五一一一
編集〇三（二六〇）五四一一　振替東京四―八〇八

印刷所　二光印刷株式会社

製本所　新宿加藤製本

定価九八〇円

© Kōji Aoyama, Printed in Japan, 1979
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

闘いの構図（下）・目次

第六章　争闘　5
第七章　終熄　47
第八章　調停　105
第九章　明暗　155
第十章　裁判　225
第十一章　解決　261
あとがき　298

裝幀・辰巳四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

闘いの構図

（下）

第六章　争　闘

一

午後七時を過ぎても、鶴見警察署の窓という窓には電燈が煌々とかがやき、相変らず、制帽の顎紐をかけた警官が、いそがしく出たりはいったりしていた。

警察署の前の国道は官庁・報道関係の自動車やトラックで埋まっていたが、署の前を離れると潮見橋のあたりまで、人っ子一人の姿も見られなかった。夕方の五時以後、附近一帯の通行が禁止されたためであったが、警察が禁止するまでもなく、住民はみな、流れ弾を避けるために雨戸を堅く閉ざし、どうかするとその上、ごていねいに頭から蒲団をかぶって、戦々兢々と息をひそめているのであった。

潮田いったいのすべての商店は云うにおよばず、警察署に近い三業地の料亭、待合、芸者屋まで、全部、臨時休業の措置をとっていた。

営業している商人といえば、鶴見署前にぎっしり詰まって駐車した自動車やトラックのあいだに、隙間を見つけて屋台をとめた支那そば屋くらいのものであった。この支那そば屋は、どうやら一ト晩じゅう大繁昌ということになりそうで、親爺は、ほくほく顔だ。警察当局の発表を待つ記者連中が、いれかわり立ちかわり首をつっこんでくるほか、交替で、戦場となった町内の警戒にあたっている青年団や消防組や在郷軍人団の人たちが、これまた、ひっきりなしに、寒さに肩をすぼめながら駈けこんでくるからだった。警察の仕事を助ける、これらの人びとによる自警団は、早早に本部を警察署前の理髪店に置き、活動を開始していた。

自警団の活動とは別個に、町会の顔役たちは顔役たちで、突発大事件による非常事態に対処すべく、緊急町会を召集し、額をあつめて協議にふけっている最中であった。

午後七時半頃、国道のアスファルトにカッカッと馬蹄の音が、いりみだれながら高らかにひびき、近づいて、鶴見署の前でとまった。応援のため、県警察部から急行してきた騎馬巡査二十名の到着である。

署長室では、蔵原警察部長を中心に、島川刑事課長、山口鶴見署長らが、悲愴な顔をつきあわせて合議をかさねていた。いましがた、はいった報告では、旭硝子工場附近、浅野造船所脇、鶴見飛行場、潮田小学校横の各所で衝突が起こっており、赤白両派の主力は、げんざい、浅野造船所前の埋立地を中にして対峙したまま、凄惨な銃撃戦を展開しているというのであった。いいかげんな情報であった。特に、鶴見飛行場や潮田小学校附近など、まったく争闘の舞台となった形跡がないことは後になって知れたが、当座は首脳部としては、報告は報告として真にうけるより仕方

がなかった。そして、このぶんでは争闘は、どこまで激化し、現場をひろげないとも限らないという推測を、いやおうなしに彼らは、立てざるをえなかったのである。

横浜市内各署からの応援警官の数は、すでに約五百名におよんでいたが、しかもなお、このままの態勢では、決戦中の双方を鎮圧することはおろか、助勢の人数の侵入阻止をふくめて、充分に警備の任をつくすことさえ、とうてい不可能という判断に、警察当局の幹部たちは、間もなく到達した。そこで蔵原警察部長は受話器をとって警視庁に電話を入れ、応援警官三百名の派遣を警視総監に要請したのであった。

時の警視総監は、第三十代太田政弘――、直ちに神奈川県警察部長の要請に応えるべく、彼は麾下警官の非常召集を警務部長に指令し、あわせて〝新選組〟の派遣を命じた。

当時、東京市内にあった警察署の数は六十五〈郡部や離島の分署等をいれると、警視庁管下の警察署は総数七十五〉警察官の総数は一万二千三百七名であった。警務部長は、京橋築地、芝愛宕、芝三田、浅草象潟、浅草日本堤ほか約十署から、非番巡査のうち特に腕自慢のもの、それぞれ二十乃至三十名を選抜召集することにし、動員事務と、この大部隊を率いて現場へ急行するという大仕事を、下僚の松枝監察官に委任した。警視総監直属、筋金入りの〝新選組〟五十名は、別に、渡部警備係長に引率させ出発せしめる――。

〈所轄署巡査の勤務体制は、大正十四年から日勤・当番・非番の三部制が実施され、三日に一度の割りで、非番休養の日が廻ってきた。日勤は午前九時から午後五時まで、当番は、午前八時から翌朝九時までの二十五時間勤務であった。当番のあけた朝、交代後が非番休養である〉

一方、海岸埋立地の主戦場では、もう一時間の余も、戦線膠着状態のまま、赤白両派のあいだに激しい銃撃戦が交されていた。

杉山・高尾組は、一気に前進しようとしては猛烈な銃火に阻まれ、逆に後へさがらねばならないありさまで、負傷者の数ばかりが増えていた。

潮田本町通りの入口あたりから旭硝子工場の前にかけて、いったいの原っぱに、畳やトタンを立てかけたり、蒲団を頭からかぶったりした木谷秀組の兵隊が散らばって、さかんに射ってくるのだが、その上さらに、本町通り入口の向う角にある伊吹屋酒店の屋根の上へ新手の射手が現われたのには、白組は悩まされた。

伊吹屋の主人南部安次郎は、もと木谷秀組の配下だったのが堅気になって酒屋をやっているのだ。はからずも、自分の店が戦場のどまんなか、おまけに木谷秀組にとって究竟の防衛地点にあたっているとなると、鉄砲を射つから屋根を貸せと云われて、いやとことわるわけには行かなかった。というより、ことわるどころか、喧嘩が始まる前から南部安次郎は、木谷秀組関係の寄り合いや集合の場所とし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

て、進んで自分の店を提供していたのである。

まったく統制のとれていない兵隊どもが、手に手に武器を抱えて右往左往するなかを、五、六人の壮漢を従え、伊吹屋へ乗りこんできたのは、長岡孝四郎の用心棒中村諦亮と横浜の博徒ダイシンこと大川新九郎であった。中村は猟銃を、大川はモーゼル自動小銃を携えていたが、彼らが率いているのは、おおよそ、東京黒龍会自由宿泊所から連れてきた土工等自由労働者であり、うち二名がモーゼル銃を、一名が猟銃を抱えこんでいた。

彼らは、伊吹屋の住まいの畳を何枚も剝がして二階の屋根の上へ運び、そいつを合掌にあわせたのを楯にして、うしろへはいった。三梃のモーゼル銃と二梃の猟銃が、いっせいに火をふきだしたのは、それからすぐである。

これらの銃は、距離は隔たっていても、二階建ての家屋の屋根の上という、いちだんと高いところから射ってくるので、へたをすると遮蔽物が役に立たない。おまけに、猟銃はともかく、機関銃同然の十連発が三梃ならんで、ひっきりなしに弾をはじき出しているのだから、杉山・高尾組は、たまったものではなかった。

砂まじりの烈風が吹きつけてくるような散弾のあらしにまじって、ヒューン、ヒュッ、と拳銃弾が来る。それを縫って、

ダン　ダン　ダン　ダン
ダン　ダン
ダーン　ダッ　ダーン

と、薄闇の空気を刻むようなモーゼル銃の発射音が、正面から蔽いかぶさってくるのであった。

むろん、こっちからもどんどん射った。射たないで、射たれる一方では気が狂ってしまう。薄闇の戦場とはいえ、お互い、発火の位置で敵の所在はじゅうぶん見当がつくので、まったくのめくら射ちではなかった。

もともと双方とも、自己部隊の位置や行動を敵の目にさらして、射撃目標となるのを避けるために、街燈や軒燈を片っぱしから叩き割ったり射ち毀したり、中には電燈線を切断した者さえあったのだが、そうして戦闘区域ぜんたいを暗黒の世界と化せしめたことが、どれだけ所期の目的を達することになったか――、おそらく、ほとんど無駄であったといえるのではなかろうか。

戦闘区域を少しばかり離れて、旭硝子工場の前いったいにずらっと、おびただしい数の提燈の灯がならんでいるのは、百名をこえる警官隊が、もはやなす術もなく、時を逐って熾烈の度を加えるばかりの乱暴者どもの戦闘を、手をつかねて見まもっているのであった。警官たちの手にしている、二本線のはいった弓張提燈は、それでも、射つのをやめろ、喧嘩やめろ、とでも呼びかけているように、たえず大きく振り動かされていた。

旭硝子工場前に集結したこの警官隊の指揮者は、豪胆をもって鳴る良田加賀町署長であった。彼は、三十名ばかり

の部下とともに、電車線路沿いの旭硝子寄宿所附近にしばらく踏みとどまっていたものだったが、さすがに、被弾の危険があまりに大きいため、急遽、部下を率い、大まわりして戦闘区域の反対側の原っぱへ移動したのだ。そこへ、横浜から到着したばかりの新手の警官隊が駈けつけ、合流したのであった。

「くそッ」

岩崎銀蔵が、いまいましそうに、手にしたモーゼル銃の銃身を拳骨で叩いた。手もちの三十発の弾を射ちつくして、何度引金を引いてみても、もう弾は出ないのだ。

「こっちも弾がねえや」

すぐ傍で、小宮仁三郎が喚いた。彼のは猟銃で、十番口径だったが、これまた、弾帯に弾がなかった。本部から弾薬補給係の来るのがおそく、ほかの、猟銃を持っている連中も、一様に弾が手薄だった。

「ひとっ走り、行って、弾取ってくらあ」

待っちゃいられないと、誰にともなく云って小宮は、銃をつかんだまま、後方の暗がりへとび出していった。隊長の許可も得ずに、勝手に戦線を離脱するあたりが、軍隊と違う点である。

猟銃組も拳銃を持っている者も、いっとき、射撃を中止する瞬間がきた。なぜという理由もなく、申し合わせたように、みなが引金にかけた指を休めたのは、そろそろ手薄になってきた弾を倹約しようという気持が、云わず語らず、はたらいてのことであったかもしれない。と、そのとき、

「うおーッ」

と唸るような叫び声をあげて、大男のカンノー〈菅野等〉が、何思ったか、手にしたシノを振りかざしながら腰を伸ばして、畳の堡塁をとび出すなり前へ駈けだした。シノというのは、鳶職のアクセサリーともいえる鉄製で先の尖った棒状の剣呑な道具で、主として、リベット・ボールトの穴を合わせるのに用いるのである。カンノーはいきなりとび出したので、誰がとめる間もなかった。とたんに、

バッ　バーン

と猟銃の発射音がはじけ、カンノーの嵩高な図体は、横倒しにひっくり返った。

彼はバラ弾を顔いちめんにくらって、血だらけだった。正面の敵との距離は六十メートルはあるはずで、それにしては、カンノーのくらったバラ弾は密度が濃すぎるようだった。いまひびいた発射音も、ぐんと間近であり、ひょっとすると、その辺の線路際にでも敵がひそんでいるのかもしれなかった。

さすが強力(ごうりき)自慢のカンノーも怪我には勝てず、ちょうど傍へ来ていた白装束の善ダンが肩をかして、手当をうけるため後方へさがっていったが、後日の話に、彼はそのあと、ゴホンと咳をしたらノドから弾がとび出したもんだと語り、仲間がゲラゲラ笑うと、まっかになって怒ったというのである。

小宮仁三郎は、近道を通って杉山組事務所へ帰り、玄関の土間へ駈けこむなり、いあわせた世話役の神山長五郎に、「クロ長の兄貴――」と声をかけた。「鉄砲の弾がねえよ」

「なにぃ、弾がない？」

クロ長といわれるだけあって、ひどく地色の黒い顔を緊張させて、神山は大きな声を出し、急いで座敷へあがっていった。

白木梅吉、井沢元治、北口寅吉、森泉彦市らと、作戦地図をひろげた大テーブルをかこんで、床の間の正面に坐っていた杉山年蔵は、顔をあげて、はいってきた神山長五郎を見、兵隊の射つ弾がないそうだという、その報告をきくと、

「うん……」

腕組みをし、その目は思わず、部屋の一方の、襖をあけはなした押入れへ行った。そこに山ほど、箱にいれて積みあげてあった散弾が、もうすっかり出はらってしまって、ないのだ。猟銃の鑑札を持っている者二十人ばかりが東京、横浜に散って、銃砲店で片っぱしから、買えるだけ買いあさって、あつめた弾だったが――。別室では寺崎忠秋が、若い衆や女たちにまで手伝わせて、カラ薬莢にバラ弾をつめ、散弾つくりに大わらわだったが、ここでも、バラ弾といっしょに薬室を仕切ってつめる、かんじんの火薬が底をついてきていた。さらにバラ弾の方は、とっくに残り少なくなっていて、砂利粒をまぜて、つめている始末だ。

「年さん」

白木梅吉の声で、杉山は、頼りになる兄弟分の大きく見開いた目を、まっすぐに見た。白木は、つづけた。

「あれを出そう。こうなったらもう……」

「そうだ、潮どきやな。あいつでドカンとやって、けりをつけよう」

井沢元治も、口をそえた。年蔵は頷いて、

「……うん、そうだな。……弾がねえんじゃあ、仕様がない」

そこでいっときまた、彼は思案する顔になった。そして、決断を押し出すような声で、

「よし、あれを出そう」

と云った。

あれが何であるか、あいつが何を意味するのか、いあわす者には、それだけで通じ合っていた。柳亭裏の旦那親分岩沢正蔵邸に一時格納されている、砲身二メートル余の鴨射ち砲のことである。東京方面から高尾善右衛門の縁者が、応援のためにとどけてよこした武器であったが、出所が誰なのか、高尾が云わないからわからなかった。しかし、うけとった作戦本部一同の推定では、どう考えても、こんな大砲なみの武器を差し入れてくる太っ肚な人物は、東京土木建築業組合長の中野喜三郎をおいて、ほかにはありえないということになっていた。

杉山年蔵は、鴨射ち砲を喧嘩場に持ち出すのは、いよい

よ最後の手段を必要とするときだけだと、前もって心にきめ、それまでは切り札としてとっておくつもりだった。舶来のアームストロング砲だといわれ、ぎっしり詰めれば十斤ぶん〈猟銃の弾約百発ぶん〉の散弾をいちどに発射するという、この火器の威力が想像できるだけに、どれだけの被害を敵方にあたえるかも測り知れない、とてつもないしろものをじっさいに使用することは、年蔵の責任感や道義観念が容易に許そうとはしないのであった。しかしいまは、最後の余儀ない手段として、切り札を出すべきときであった。闘いには是が非でも勝たねばならないのである。

「彦さん」と年蔵は、森泉彦市に云った。「高尾〈組〉へ声をかけて、すぐ、あのでかいやつを曳き出してくれ」

「ようがす！」

森泉は、とび立つように腰をあげて、座敷を出ていった。

神山長五郎があとを追った。

白の帷子に白襷の小宮仁三郎も、ありったけの弾をかきあつめて、前線へ駈け戻っていった。

杉山組事務所から、家並にして七、八軒はなれた、おなじ並びの、潮田神社への曲り角にある交番では、どちらも四十恰好の巡査と在郷軍人とが、山盛りに炭火をおこした大火鉢にのしかかりながら、大声で話し合っていた。在郷軍人の着ている、赤い肩章のついたカーキ色の軍服からは、樟脳の匂いがプンプンしていた。

「いまんとこ、杉山組がぐんぐん押してるようだが、土壇場で押しかえされるってこともあるからな」

「なんしろ、杉山組は千人、木谷秀組は二千人の勢力だっていうから、本来からいうと勝ち味はないのに、よく頑張ってるね」

「それにしても、助っ人っていうのは役に立たんもんだな。大阪から来た連中、はじめは、わあわあ騒ぎ立ててたが、いつの間にか、大半いなくなっちまったじゃないか」

「その辺の飯屋や飲み屋は、連中で満員だよ。柳亭へも、いっぱいあがりこんで、のんだくれてるらしい」

「片一方では、命がけで射ち合いをやってるというのにな」

「京浜鶴見の待合では、大阪の親分衆が博奕の盆を敷いてるって話だ」

「へーえ、署のお膝元でな。面当てのつもりかな」

「まさか」

交番へは、炭は俵で、酒は一升壜を何本も、杉山組から付けとどけがしてあった。そんなことがなくとも、近所の誼から、潮田神社前交番の巡査は、なんとか杉山組の勝ちいくさに終ってほしいものだという気持がつよいのであった。そして、この巡査に限らず、近所の誼はなくとも、おそらく潮田の町の住民ぜんたいに、こうなった以上は杉山組に勝たせたいという漠然とした気分が瀰漫していたに相違ないと思われる。潮田本町通りいったいのあらゆる商店、

会社から農家にいたるまで、木谷秀睦会会費の名目で賦金を取り立てられており、応じなければ妨害、いやがらせは必定で、業務は立ち行かなくなる。農家も安心して田畑を耕すことができない。泣く泣くみながら木谷秀組の苛斂誅求に甘んじているという実情は、潮田の住民なら誰でも知っており、暴戻なる木谷秀組が叩き伏せられるのを見ることほど欣快なことはなかったはずだからである。

もっとも、木谷秀組と杉山組とのあいだに紛争があり、両者の決戦は避けられぬ雲行きだと伝えられたとき、たとい高尾組が杉山組に荷担しても、微々たる彼らの力をもってしては、とうてい木谷秀組の強大な勢力に対抗できるものではないと、町のひとびとは一様に思ったものだった。つまり、木谷秀組は強者であり、杉山組は弱者であった。判官贔屓のムードが、戦闘の舞台となった町の住民のあいだに実在したことは間違いない、というようにも考えられる。

交番の前の辻には、提燈を手にした在郷軍人が二人立って、警備にあたっていた。潮田神社前交番が、さしあたり彼らの警備詰所であった。

さきほどまで、二十名ほどの警官隊が杉山組事務所附近をかためていたものだったが、どうやら木谷秀組が襲撃をかけてくるということもなさそうな形勢なので、五、六名をのこして、あとの警官隊は埋立地の主戦場の方へ移動していった。

しかし、あかあかと明りをともして、総帥の杉山年蔵はじめ大幹部が顔をそろえている杉山組事務所では、敵がここまで攻めてくることはないときめてかかって、のほほんと構えているわけではなかった。要所要所には歩哨を配置して、見張りをおこたらず、事務所の前や裏手には、パネルや角材で急ごしらえの防塁をきずき、いつでも敵を迎え撃てるよう準備ができていた。

事務所の隣りの空地の大テントでは、さかんな木炭の焚火をかこんで、立番や見廻りの若い衆が交代の順番待ちをしており、炊出しの竈の火は消えることがなかった。

杉山年蔵の指令をうけて、鴨射ち砲を曳き出すことになった金田組大世話役の森泉彦市は、舎弟の五十嵐敬之助と杉山組世話役の神山長五郎をひきつれて、すぐ目と鼻のさきの高尾組事務所へ駈けこみ、いあわせた帳方の坂本親義に、いよいよ大砲の出番だと告げた。よしきたとばかり、坂本は椅子から立ち、玄関先へ出ると、立番の若い衆に、

「おい、種さんをよんでこい」

と云った。そして、舎弟でやはり帳方の岩田高英といっしょに、先に立って、柳亭裏の岩沢正蔵邸へ急いだ。

ちゃんと段取りはできているのである。〝般若の種吉〟こと荒川種吉は、鳶の若い衆だが、現役召集で砲兵隊にいたことがあるので、大砲が射てるだろうということから、鴨射ち砲の射手として待機させられているのであった。

一方、砲身二メートルあまりの鴨射ち砲は、すでに馬力

〈荷馬車〉に搭載して、ワイア・ロープで荷台にしばりつけられ、シートをかけたまま、いつでも曳き出せるように岩沢邸の裏庭に据えてあった。ちょうど、岩沢家に住込みの若い衆で、活動写真館潮田館の出札係をしている芝塚照一が、シートをはねのけて、せっせと油布で砲身に磨きをかけているところだった。とびこんできた喧嘩支度の岩田高英が、

「よお、照さん――」

と、元気いっぱいの声をあげた。二十歳になったばかりの岩田は、活動写真が何より好きで、番組のかわり目ごとに、芝塚に、タダで潮田館の木戸を通してもらっている。

「ぶっぱなすのかい？」

ほの明りに黒光りしている砲身をぴしゃぴしゃ叩きながら、芝塚照一が云った。

「でっかい音がするだろうなあ」坂本親義が応えて云った。

「木谷秀のやつら、ぶったまげやがるぜ」

埋立地の方で、ひっきりなしに弾けている銃声が、町の家並をこえて、乾いたひびきを伝えてきていた。

「先曳きの綱をつけよう」

という森泉彦市のことばで、芝塚が、ロープを取りに納屋へ走った。

そこへ、白木梅吉乾分の三田信太郎と杉山組帳方の杉山六次郎が、二人とも、布でくるんだ上から紐でからげたものをだいじそうに抱えて、駈けつけてきた。見かけは小さいが、すごく重い、その布包みのなかみは、つごう四個の砲弾であった。といっても、手づくりの砲弾であり、バラ弾と火薬を猟銃弾とおなじ要領で薬莢に詰めこみ、寺崎忠秋があらかじめつくっておいたものだ。鴨射ち砲といっしょにとどいたカラ薬莢は四個しかなかったので、したがって、砲弾の数もとりあえず四発というわけだったが、そのカラ薬莢なるものが、直径七センチばかりもあり、七、八斤〈一斤は六百グラム〉ぶんのバラ弾がらくにおさまるという代物だ。こんなとてつもない散弾の威力は、前例が知られていないだけに、よけい測り知れぬものがあると思われるのであった。

五十嵐敬之助と岩田高英が先曳きの綱をひき、芝塚照一と三田信太郎が後押しをして、鴨射ち砲をのせた四輪の馬力をガラガラと岩沢邸の裏庭から曳き出したのは、間もなくである。むろん、シートをかけてある。神山長五郎がこの一隊の指揮をとり、森泉彦市や坂本親義、杉山六次郎はあとへのこることになった。

ひっそり閑と息をひそめている気配の狭い路地へ、やっとのことで馬力を曳きこみ、潮田の通りまで出たところに、ニッカボッカーに地下足袋をはいた足を仁王のように踏んばり、白鉢巻をした〝般若の種吉〟が待っていた。

種吉は荒川登喜蔵の乾分だから、いわば高尾善右衛門とは兄弟分のようなものだったが、とてもそれほどの貫禄ではない。高尾組の屯所になっている事務所裏手の東漸寺境

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com